
a kiss ～ 接吻

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a k i s s 接吻

【Nコード】

N 4 4 7 0 I

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

接吻にまつわる、8つのお話。

あなたは何色のお話が好きですか？

手の上なら尊敬のキス（前書き）

それではごらんください

手の上なら尊敬のキス

その日は昼間だというのに、薄暗い日だった。

柚姫が窓の外を見ると、雨が降り注いでいた。

前の日の晩から降り続いた雨は、今なお止む気配を見せなかった。

室内には、うつすらと紅茶の香りが漂っていた。

外を見ていた柚姫は、室内にあるグランドピアノへと視線を戻した。

室内には、しっとりとした、綺麗なメロディが流れていた。

鍵盤の上を滑らかに動いている指を、柚姫はじつと眺めていた。

柚姫が座っている椅子からは、演奏風景がよく見えた。

ピアノを弾いているのは、柚姫が教えてもらっているカイ先生。

柚姫が先生にピアノを教えてもらい出したのは、小学生の頃だった。

それまでは、独学でピアノを勉強していたのだけれど、色々と限界が来ていた。

その時、母の知り合いから紹介されたのが、先生だった。

昔は、プロになれるチャンスもあったという先生。結局それは辞退してしまったそうだけれど。

どうしてなのか、とか気にはなるけども、知らなくていいことだと柚姫は思っている。

柚姫は、純粹にピアノが大好きだった。きっかけは、小さい頃に買ってもらった、小さなおもちゃ。

勉強はしていたけれども、プロになろうなんてこれっぽっちも考えていなかった。

音楽関係の先生というとプロを最終目的にしているような、そんな先入観があった。

だから、最初は柚姫は先生に教わることを渋っていた。

しかし何度か教わっている内に、カイ先生はそんなタイプではないということがわかった。

それからは週二回のレッスンがとても楽しみになっていた。

カイ先生が今弾いている曲は、ノクターン。有名な、ショパンの曲。

窓の外の雰囲気と合わさって、耳にとっても心地よい。先生の腕が良いというのも関係しているんだろう。

今は授業の時間は終わった後、いわば、放課後のようなものだった。

お互いに、休憩しながら好きな曲を弾く時間。柚姫は、この時間が好きだった。

技術の上手下手に関わらず、アレンジを加えたりしても弾いてい

いから。
それに、先生もののびのびと色々な曲を弾いてくれるから。
次は何の曲を弾こうかと柚姫が考えていると、静かに演奏が終わった。

拍手をしようかと一瞬考えて、止めた。演奏会でもなく、好きに弾いているだけなんだから。

「素敵な演奏でした、先生」

テーブルへ近寄ってくる先生へと柚姫は声を掛けた。

「ありがとうございます。退屈ではありませんでしたか？」

「退屈だなんて、とんでもないです。とっても落ち着きましたよ」

艶やかな金色の髪を揺らしながら、先生は柚姫の隣に腰掛けた。

先生に会ったたびに、とても綺麗だと柚姫は思う。

前に聞いたのだけれど、お母さんがイタリアの人なんだそう。

染色したものと違い、とても自然で美しい金髪。瞳は澄んだ青色。

よく晴れ渡った日の海のようにだと柚姫は思った。

「柚姫さんは、次に何を弾くのですか？」

紅茶を飲みながら、柚姫は答えた。

「雨だれの前奏曲を弾こうかと思っています」

その曲は、柚姫が幼い頃から好きな曲だった。

出だしはリズムカルで美しいのに、中ほどにもなると重く暗いパートがある。

そのギャップが、柚姫は好きだった。

この曲は比較的簡単な部類に入る。しっかりとピアノを勉強している人ならば、とりあえずは弾けるような。

これもノクターンと同じくショパンの曲だった。

先生が紅茶のカップを置いて、柚姫に尋ねた。

「柚姫さんは、どうしてピアノを勉強しているんですか？ プロになる気はないのでしょうか？」

「もちろんです。先生ならともかく、わたしがプロになんてなれるはずないですよ」

「そうですか？ 努力すればできるかもしれませんよ？」

微かに微笑しながら、柚姫は答えた。それを聞いて、先生もまた微笑んだ。

普通、講師と生徒の間には、流れない雰囲気。

お互いに笑いながら話をできるくらいには、二人の仲は良かった。

「わたしは、努力してまでピアノをやりたいはありません」

柚姫にとって、ピアノとは楽しいもの、自分を豊かにしてくれるもの。

必死になつて、血眼になつてまでやりたくはないものだった。

今だって、講師がそういうタイプだったなら、ピアノをやめていたかもしれないかった。

そうじゃなかったら、下手なままでも独学で弾いていた。

そこでふと柚姫は思った。

先生は、どうしてピアノを教えているのだろう？ プロにもなれたはずなのに。

「どうして先生は講師をしているんですか？」

そう柚姫が尋ねると、先生はきよとした顔をした。

「どうしてって、ピアノが好きだからです。色々な人に、楽しんでもらいたいのです」

「プロに……っていうお話もあつたんですよね？ 辞退されたと聞きましたけど」

柚姫からすれば、プロもすごいものだと思う。

大勢の観客から喝采を受けているから。地位や、名誉もあるのかもしれない。

柚姫がそう伝えると、だからですよ、と先生は答えた。

「楽しみよりも、評価や理論、そういうものの方が勝っているのです。」

純粹に弾いても、後から面倒なものがたくさんついてくるんですよ」

だから、疲れてしまうんです、と先生は付け足した。

その表情は、いつのまにか少し翳りが見えていた。

柚姫は、それ以上はなにも聞かないでおこうと思った。

そのまま、会話が止まってしまった。

何か場の雰囲気を崩そうとして、柚姫はこういった。

「はあ……それにしてもわたし、せっかく先生に教えてもらってるのに、全然上手くならないですよね……あ、先生の腕が悪いという意味じゃないんですけど……」

いつものように、笑って返してくれると思っていたのに、先生の反応がなかった。

どうしようと柚姫が考えていると、先生が話し出した。

「柚姫さん、私はあなたを尊敬しているんですよ？」

いきなり真顔で先生がそんなことを言うので、柚姫は吹き出してしまった。

「おや、信じていませんね？ 笑う所ではないんですよ……」

「だって、尊敬だなんて。わたしが、ならともかく、どうしてですか？」

「柚姫さんは、とても楽しんでいるでしょう？ それに、努力もしています」

「そんなに必死にやっているように見えますか……？」
「もしもそうだとしたら、少し見苦しいなと思った。
そういうふうにはやりたくないのに。」

「だからですよ」

今度は、柚姫がきよとした顔になった。

「しっかりやってるけれど、ちゃんと息抜きもしているでしょう？
私は、そこまで器用じゃないから、羨ましいんですよ」
そういった後に先生は続けた。

「あなただったら、どうなっていたでしょう——」

何かとても大事なことの気がしたけれど、柚姫にはその意味がわからなかった。

「え、ええと……とりあえず、ありがとうございます」

わかったのは、どの程度かはしれないが、先生から尊敬をされているらしいということ。

恥ずかしいやら嬉しいやらで、柚姫は俯いた。

すると先生はこんなことを言い出した。

「あまり信用されていないようですね……では、こうしましょう」
柚姫の手を先生が取った。柚姫は何をされるのかわからず、ただ見ているだけ。

そのまま柚姫の手に、先生はそつとくちづけを落とした。そして、柚姫を見て微笑んだ。

驚きのあまり、柚姫は固まったままだった。

「——っ、えつと……あの先生？ 今のはいったい何……」

「おや、知りませんでしたか。なら、後で調べてみてはどうですか？」

「何を？」

「今私がしたことですよ。手の甲にしたということを、忘れないでくださいね？」

そういつて先生は、悪戯っぽく微笑んだ。

その微笑みは、とても綺麗で、柚姫は顔に熱が集まるのを感じた。
「そろそろ、曲……弾きますねっ」

逃げるようにして、柚姫はピアノの前へと向かった。

どきどきする感情を抑えて、ひとつ大きく深呼吸をした。

鍵盤の上の指は、曲の最初の位置に、自然に置かれていた。

自分の中でリズムを取ってから、柚姫は演奏を始めた。

ピアノの音色に、言葉にできない思いを乗せる。

恋愛とかそういうドロドロしたものじゃなくて、もっと純粋な尊敬を。

綺麗な音に乗って、先生へと届くように願った。

言葉にしてしまうと、嘘みたいになっちゃってしまいそうだったから。

ただひたすらに降り続ける雨音に重なるようにして、澄んだ音色が響く。

静かで穏やかな時間が、また流れ出した――

美しい細い手に 澄んだ蒼い瞳に

この想いが伝わりますように

尊敬を 雨だれの音に乗せて

手の上なら尊敬のキス

手の上なら尊敬のキス（後書き）

お楽しみいただけましたか？

感想、コメント、アドバイスなどお待ちしております。

ちなみに、グリルパルツァーの詩よりイメージしてみたものです。

額の上なら友情のキス（前書き）

額の上なら友情のキス

学校の屋上には、春特有の柔らかな風が拭いていた。

お昼時にも関わらず人はほとんどいなかった。

柵にもたれかかっている男と、それを離れた場所から見ている女以外には。

吹き抜ける風は爽やかだけれども、杏子の気分はちつとも爽やかではなかった。

杏子の気分を害しているのは、落ち込んでいる哲生が原因だった。うんざりとしながら、落下防止用に設置されている柵をみた。

そこには体を持たれかけながら、憂鬱な顔をしている哲生がいる。昔から、何かあるとすぐ落ち込む癖が哲生にはあった。わかつてはいるものの、今回はひどかった。

見ているこっちまで気分がめいってしまいそうなほど、暗い顔をしている。

「はあ……まったく。どうにかならないのかな、あれ」

哲生を見て、杏子は再びため息をついた。

放っておいたらいつまでも落ち込んでいそうなので、仕方がなく哲生へと声を掛けた。

「ちよつと、テツ。いつまでそうやってるつもりよ？」

「ああ？」

落ち込んでいるせいかわからないが、普段よりも少し柄が悪い。まったく何よ。

この前の大会で負けてしまったくらいで、少々落ち込みすぎじゃない。

こんな所で落ち込んでいるよりも、次の大会に向けて頑張った方がいいと杏子と思う。

「いつまでだったって、仕方ねえだろ？ やる気も何も全然起きない

んだよ」

体は一応杏子の方を向いているが、中身はまったく入っていない。「ちよつと、もう少しシャキツとしたらどうなのよ？ 大会はあと一回しかないのよ」

三年生である杏子たちにとって、大会のチャンスは直になくなってしまう。

出れたとしても、次の夏の大会までだろう。

それも、予選で負けてしまえばそこで終わり。後は部活に打ち込む時間もなくなってしまう。

杏子はマネージャーとして部活に参加しているのだが、スケジュールに余裕はない。

他の部員は気持ちを切り替えて既に練習を再開している。彼だけが止まっただけ。

「皆はもう練習再開してるのよ？ 落ち込んでる暇があるんだったら——」

「五月蠅いんだよ！ 俺に指図するなっ」

杏子の言葉は、哲生の怒鳴り声に掻き消された。

その声の大きさに、杏子はひどく驚いた。少し怯むものの、負けじと声を張った。

「何よ、アンタのこと心配してやってるのよ？ 怒鳴ることないじゃない！」

「ああ！？ 心配しろだなんて、誰も頼んでないだろうが」

「だからその態度！ そんなだから、負けるのよつ。皆に追い抜かれるわよ？」

ちよつと言い過ぎたかな……でも、きつく言わないと薬にならないぞうだし。

これも哲生のためだと思い、さらに杏子は言葉を続けた。

「屋上で暇つぶしてるんだったら、さっさと練習に——」
「……るさい」

低い声が聞こえて、杏子は喋るのを止めた。

「五月蠅いっていつてるだろ!? 口ばかりだしやがって、邪魔なんだよっ」

「アンタが動かないからでしょ!？」

いらつとして、杏子は噛み付いた。けれども、哲生は以前として怒ったまま。

「さつきから黙ってれば、痛いところばかりつきやがって……大体な」

「実際に動いてるのは俺たちなんだよ。ただ見てるだけのやつが偉そうになんだ？」

マネージャーなんて邪魔なだけなんだよっ!」

哲生の言葉を聞いて、杏子の頭の中で何かが切れる音がした。

一体誰が黙って聞いてたっていうのよ……? それにマネージャーなんていらなそうですって?

私がいなきや、ろくな練習メニューも組めなくせに。

そもそも哲生ったら、いっつも大事なことの前には体調を崩すのよ。

別に今回負けたのは体調不良が原因ではないのだけど……納得いかないわ。

自己管理もできないやつに、いらななんていわれる筋合いはないわ!

イラつきと怒りが収まらなくなって杏子は哲生に言った。

「あつそう、それじゃあ勝手にすればいいわよ! 自分達だけで一生懸命練習したら?」

そっぴい捨てて杏子は屋上からでていってしまった。

後に残されたのは、苛ついた哲生だけだった。

静かな屋上に、舌打ちの音が微かに響いた。

それから数日間、杏子と哲生は言葉を交わさなかった。

学校の廊下などですれ違っても知らぬ振りをしたし、哲生は部活

にも顔をださなかった。

最初は杏子も気にしていなかったものの、それが続くとさすがに気になった。

はぁ……まるであたしが悪いみたいじゃない。

体育館で、部活の様子を眺めながら、ため息をひとつ。

部員たちの動きを見ていても、どことなく普段よりも鈍い。

——哲生がいないせいかしら。

この間は根暗だったが、本来哲生は快活な性格だから。

部員の間でもムードメーカー的な存在なのかもしれない。

やっぱり、もう一回話したほうがいいのかしら。それとも部員と協力してむりやり連れて来ようか……

しばらく考えた結果、杏子は哲生と話をすることに決めた。

皆は忙しいんだから、私がなんとかしなくちゃ、ね。

マネージャーは必要なんだから。

目的さえ決まれば、杏子はすぐに行動する。

体育館から、必要なものを取りに教室へと杏子は向かった。

部活動が始まる少し前。放課後の教室はで哲生は暇をもてあましていた。

足を机の上に乗り上げ、視線は他愛のない話をしているクラスメイトへ向けられていた。

「おいテツ、今日どっか遊びにいかないか？」

「またバスケット練習に付き合ってくれよ！」

「悪い、今日はパスな。また今度付き合ってやるからさ」

帰りがけの友人らに遊びに誘われるものの、哲生は乗り気ではなかった。

だんだんと人の減っていく教室の中で、哲生はため息をひとつ吐いた。

まったく……これからどうするかな。

この間杏子に啖呵きった手前もあって、中々部活動には参加しづ

らい。

かといって、他の友人達と遊ぶ気にもならない。

自分で言うのもなんだが、とても情けない気分だと思う。

あいつは普段めつたに怒らないから、少し愚痴っただけだったのにな。

まさかあんなに怒鳴られるとは思いもしなかった……

部活動よりも、杏子に対して乱暴な対応をしてしまったことを哲生は気にしていた。

やっぱり謝ないとまずいよな……しかしどうやって謝ろうか。

部活動にも参加したいし、きちんと謝っておきたい。

それを両方達成するにはどうしたらいいのか――

人のいなくなった放課後の教室で、哲生は考え続けていた。

まさか数日後に、当の本人から呼び出されるとも知らずに――

明くる日。杏子は放課後、屋上へと向かっていた。

屋上で待っているだろう哲生に会うために。

あいつ……これですっぽかしてたら、承知しないわよ……

杏子の頭の中に、つかの間剣呑な考えが浮かんでは消えた。

休み時間を利用して、哲生のクラスの人に言伝を頼んでおいたのだ。

放課後に、屋上に来るようになって伝えて欲しい。無視したら……

どうなるかわかってるでしよう？

言伝を頼んだ人の顔色が若干悪くなったのはきつと気のせいだろう。

軽く指の骨を鳴らしながら、屋上へと続く階段を上り、扉を開けた。

爽やかな風の吹く屋上に哲生の姿を見つけて、杏子は走り寄った。走り寄る杏子を見て、哲生はぎょっとしていた。

表情は笑顔なのだが、背後に怖いオーラが見えた気がしたからだ。

気のせいだと願いたい。

「テツ、来たわね！」

「おい、お前のその勢いが恐ろしいんだが……」

「何よ、この間は威勢がよかったのに、今日は随分としおらしいのね」

その様子を見て、杏子はすこし意外に思った。

この間のように柄が悪いままかと思っていたのだ。哲生にも思うところがあったのだろうか。

そんな事を考えていると、哲生が真面目な顔をして杏子に何かを言いかけた。

「それで、さ。この間のことなんだけど――」

「はいっ、これ持ちなさい！」

無駄に堅苦しくなりそうだと思った杏子は、何かを言いかけた哲生の言葉を遮って一冊のノートを渡した。

色々と悩んで考えた言葉を遮られた哲生は驚いた顔をしていた。最後までいわせろよ、と内心で悪態つきながらもノートを受け取った。

ノートのページをばらばらと捲った後、哲生は杏子にいった。

「おい、これってもしかして、練習メニューか？」

そのノートには、補強運動や、シユート練習などのスケジュールが組まれていた。

体育館に張り出されていたものを哲生は見ていたが、それとはまったく違うメニューだった。

むしろ、かなり厳しく組んであるほうだ。

なにが楽しいのか、いじわるそうに笑いながら杏子という。

「そうよ。テツ専用の特別メニュー。嫌とはいわせないわよ？」

「嫌とはいわないけどよ……これ、キツすぎないか？」

それを聞いた杏子の眼が軽く据わる。

「キツイですって？ それはアンタが悪いんでしょう？ 今まで練習さぼってたんだから。」

うかうかしてると、皆に抜かれるわよ？」

部員の中では哲生が一番上手なのだが、他の部員たちも負けてはいない。

少し盛り上がり欠けていたけど、みんなちゃんと練習してたもの。

「それともなに、やりたくない？」

さつき、嫌とはいわせないとか言っていたのは何処の誰だろう。そんなことを思いながらも、哲生は不敵に笑って返事をした。

「まさか。喜んでやらせてもらうぜ、ありがとうな」

「当然よ。これで次の大会も負けたら、本当に怒るわよ……？」
そういう杏子の顔は、やはり怖い。

「それはわからないけどな。まあ、やれるだけやってやるよ」

「いまいちな返答ね……あと一押し必要ね」

「おい、俺はやるっていつてるんだが」

「哲生、ちよつと目つむって」

「はっ、なんでだよ!？」

「い・い・から」

哲生は軽く抗議をしたものの、杏子には敵わなかった。

意味がわからないまま、目をつむる。目をつむっていても、外の日差しは眩しかった。

頭でも殴られるんじゃないだろうかとひやひやしていると――

何か、額に柔らかなものが触れた感触があった。

「もっいいいよ、目開けても」

いわれるがままに哲生は目を開けて、今のはいったいなんだったのかと考える。

とりあえず暴力的なものではなさそうだったが……妙に柔らかかったな。それに少し温かった。

少し考えてもわからないので、哲生は当の本人に聞いてみることにした。

「おい、今の感触……一体なんだ？ 妙に柔らかかったんだが」

「ん？——額にキスしたの」

杏子の言葉を聞いて、ぽかんと大口を開けたまま哲生は固まってしまった。

それを見て、杏子は楽しそうに笑っていた。

「おっ、い……何してんだよ!？」

あらやだ。哲生ったら、顔がリンゴみたいに真っ赤。薬が効いたみたいね？

笑いすぎて痛いお腹を抱えながら、杏子は言った。

「だから、一押しよ。次の大会で負けたら……今度は口にするわよ」
ニツコリと怖い笑顔でさらりとすごいことを杏子は言った。

それを聞いて哲生が少し青ざめた。

「それは……女子としてかなり問題だろっ？」

「まあ、罰ゲームとでも思えばいいじゃない？ ふふふ」

だんだんと、哲生の顔が引きつってきたのは気のせいかしら。

「大丈夫、額だから、変な意味はないわ」

「変な意味ってなんだよ!」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ哲生へと、杏子はいった。

「とにかく、この私がサポートするんだから、しっかり頑張りなさいよ?」

「——っ、とにかく、部活は頑張ってやるよ」

そういうと、哲生はいつものように笑った。

少しけだるそうな、でもやる気に溢れた笑顔。

これで、もう大丈夫そうね……

部活には支障がなさそうだと判断した杏子は、屋上を後にした。

その横では、哲生がノートを見ながら歩いていた。

スケジュールを頭にいれているのだろっ、真剣そのものの顔。

哲生にすら聞こえないような声で、杏子はぽつりと呟いた。

「テツにとつては、罰ゲームなのかな……」

その声を拾ったのは、吹き抜ける春風だけ。

春に吹く風のように　ただ静かに寄り添い続ける
その想い　決して昇華することもなく　違えることもなく
諦めることも知らないままに　ただそこに在り続ける

額の上なら友情のキス

頬の上なら厚意のキス

薄暗い通り道を、提灯の明かりが照らしていた。

賑やかな雰囲気の屋台が並ぶ道に、鮮やかな着物の色が映えた。

一つは、ゆつたりとした足取りで、もう一つは今にもスキップしそうなもの。

二人は離れないように歩きながら、お祭りの会場へと向かっていた。

可愛らしいピンクの浴衣を揺らしながら、奈菜は歩いていた。

本当は今にも走り出したいほどウキウキしていたけれど、姉を置いていくのが嫌だから歩いていた。

奈菜より少し遅れるようにして友里が歩いていた。

おしとやかな見た目とは違った赤い浴衣がとてもよく似合っていると思った。

夏祭りなんて何年ぶりだろうか。前に来たのは、随分と幼い頃だった気がする。

「姉さん、前に来たのっていつだっけ？」

「そうね……小学生じゃなかったかしら？」

おつとりと友里は答えた。

そんなに昔だったのか……と思いながら、奈菜は歩いた。

最初の頃よりも、歩く速さが増しているのは気のせいではない。

久しぶりだと思うと、いてもたってもいらなくなったのだろう。

そんな奈菜を見ながら友里は苦笑していた。

小さい頃とまったく変わっていないかと思いつながら。その歩みは遅れぬようにと小走りになっていた。

夏祭りの会場はとても賑わっていた。

老若男女問わず多くの人が露店や屋台の周りに集まっていた。

会場に着くと、奈菜は人混みの中へと走りつていつてしまった。置いていかれる形となった友里は、何を買うでもなくゆつくりと見物をしていた。

少し古くさい気もする、かき氷の機械。シロップが掛け放題となっていた。

はしやぎながら選んでいる子供の器をよく見ると、まっくろになっっているものもあった。

友里はそんなに多くは混ぜなかったけれど、奈菜がやっていたことがあった。

奈菜いわく、見た目は悪いけど味はそこそこいいらしい。

苦笑交じりに、歩いていく。

色とりどりの水風船のヨーヨー。何があたるかわからないくじ。

少し派手なアクセサリー。

つやつやとして、とっても美味しそうなりんご飴。昔は不思議で

仕方がなかったわた飴。

大人になった今でも、お祭りは楽しいものだった。

子供達の嬉しそうな笑顔やお店の人の気合の入っている顔。

ふだんあまりはしやがない友里でさえも、飛び跳ねなくなるような。

中央にはやぐらの上に太鼓が置いてあり、いい音が聞こえる。

その周囲では浴衣を着た人達が盆踊りを踊っている。

友里はとりあえずとりんご飴を買って、会場の隅へと移動した。

楽しいのはいいのだが、人混みは苦手だったから。

あの頃ならば、関係なしにはしゃいでいたのだろうか、とふと考えた。

今では子供に混じって騒ぐのが、恥ずかしいと思ったから。相変わらず、奈菜ははしゃいでいそうだったのだけれど。

奈菜は何処へいったのかと、周りをきよるきよると見渡す。

浴衣の色で探そうとするものの、案外ピンク色というのは多かった。

人が多すぎて見つけれないだけかもしれないが。

探しに歩こうかと友里が考えていたときだった。

「あ、姉さんこんな所にいたの？　ちゃんと楽しんでる？」

そう話す奈菜の両手には、屋台の戦利品と思われる物が抱えられていた。

くじ引きで当たったであろうぬいぐるみ、ふわふわのわた飴。

腕から下げられている袋の中には、パックに入ってたこ焼きや焼きそばが入っていた。

どれも二つずつあるから、きっと友里の分なのだろう。

少し多すぎないかと心の中で苦笑しながら、奈菜に返事をした。

「奈菜はとっても楽しそうね？　ねえ、少し移動しない？」

「もう？　姉さんは他に食べ物とかいらないの？　りんご飴だけ……」

友里の手に握られている、半分ほど食べられた飴をみて奈菜がいう。

「食べ物なら奈菜が持っているじゃない。それで充分よ？」

そういうと納得したように軽く頷いて、奈菜は友里の手を取り歩き出した。

奈菜に友里が連れられてきたのは、祭り会場から少し離れた所にある公園だった。

離れたせいで、祭りの様子がより賑やかに見える。

家へと向かう人が時折通り過ぎるくらいで、静かな場所だった。

置いてあるベンチに腰掛けたところで、友里はあることに気が付いた。

この場所にも、ずいぶんと昔に来たことがあるような気がしたのだ。

なんだか、とっても懐かしい感じがするわ。いつだったかしら……昔の記憶を手繰り寄せようとしていると、隣に腰掛けた奈菜が言

った。

「ここさ、前にも来たことあるの覚えてる、姉さん？」

友里の記憶は間違っていなかったらしい。さらに深く記憶を辿ってみる。

確かあれは――小学校くらいの頃だった。

今日みたいに夏祭りのある日で、少し疲れてこの公園で休んでいた。

その時も今みたいに、虫の声だけが響く中、二人でいた。

あの時はまだ、私も大げさにはしゃいだりしていた気がする。

思いつきり遊んだり、はしゃいだりしてもいい年齢だったから。

二人で休んで帰ろうとした時に、奈菜が履いていた下駄の鼻緒が切れてしまった。

だから私が、奈菜を背負って帰った記憶がある。

妹よりは年上だったけれども、すごく大変だったのを覚えている。でも無理に歩いて、転んだり怪我をさせるのも嫌だった。

おぶっている帰り道、後ろから申し訳なさそうに奈菜は謝っていた。

「覚えてるわよ。鼻緒が切れて、大変だったもの」

友里がそういうと、奈菜は懐かしそうに笑った。

「そうそう。帰り道が大変だったよね。あの時は結構悔しかったよ。それは、人に面倒を見てもらった事が悔しかったのだろうか？」

「歩けるっていったのに、姉さんったら背負うんだもの」

そういえば説得するのが大変だった気がする。歩けると駄々をこねていたから。

座ったまま足をぶらぶらとさせて奈菜は言う。

「でもね、姉さんには感謝してるよ？ あたし一人だったらたぶん泣いてそうだし」

「そう？ 奈菜は強いから、泣いたりしないでしょ？」

「それは姉さんがいるからなんだけどな〜まあいいか」

そうつと奈菜はベンチから立ち上がった。それを見て友里も腰を上げた。

「そろそろ帰ろっか？ これは家に帰ってから食べようね」

手にぶら下げた袋をぶらぶらと揺らしながら奈菜がいった。

いわれたから気が付いたのだけれど、結構な時間休んでいた気がする。

先に歩き出す奈菜の後についていこうとしたときだった。

「あ……」

思わずでしまった声に、何かと奈菜がくるりと後ろに振り向いた。

歩いたとたんに、下駄の鼻緒がぶつりと切れてしまったのだ。

「鼻緒が切れてしまったみたい……でも、これくらいなら——」

大丈夫と、いうよりも早く奈菜が隣に来ていた。

「切れてると、結構歩きづらいでしょ？ 肩貸すよ」

「ありがとう」

確かに、とても歩きづらいから本当に助かった。

「ありがとうね？ 奈菜」

友里がそうつと隣で奈菜は元気よく笑った。

「だって、あの時は姉さんに助けてもらったもの。今度は、あたしの番だよ」

その言葉を聞いて、無性に嬉しくなった。

こんな妹をもって、私は幸せ者だわ。

二人でゆつくり歩きながら、そんなことを友里は考えていると。

「あ、姉さん。ちよつとこつち向いて？」

「何……」

友里は言われたとおりに振り向くと、頬に何か柔らかい感触を感じた。

頬に、奈菜がキスをしているのだと気づくのの数秒かった。

「ちよ、ちよつと、何なの？」

おかしいくらいにうるたえる友里を見て、奈葉は少し恥ずかしそうに笑った。

「あたしから姉さんへの、感謝の気持ちだよ」
驚きが嬉しさと、誇らしさへと変わった。

「そう……ありがとうね、奈葉」
しあわせを噛み締めながら、友里は家へと向かって歩いていく。
姉妹そろって、二人で歩いていく。

強かな絆 結ばれることはあれど 解けることは決してあらず
刹那の祭りごとなれど 告げられた思いは永遠に
密やかに 美しく 胸の奥で瞬き続ける

頬の上なら厚意のキス

唇の上なら愛情のキス

瞼の裏に、ちかちかと光が見えた。

ゆらゆらと映るそれが眩しくて楓夏は目を開けた。

ベッドの上で少しだけ上半身を起こす。瞬きをしながら窓を見ると、カーテンが揺れていた。

ふわふわと揺れるカーテンの隙間から朝の光が差し込んでいた。だから眩しかったんだ。

眩しさの原因が分かって、楓夏はまたもぞもぞとベッドにもぐりこんだ。

休日に朝早く起きる必要はなかった。ふかふかの掛け布団が気持ちいい。

布団の暖かさも良かったけれど、背中にあたる温もりも心地よかった。

体を反転させて、隣で眠る愛しい人を見た。

楓夏の方を向いて眠っている彼。

「浩？」

小声で名前を呼んでみたけれど、起きる気配はなかった。

少し硬い黒髪髪をすいてみたけれど、やっぱり起きなかった。

瞼も震えないから、寝たふりをしているのかどうかもわからない。つまらないけど、起こすのも申し訳ないので、楓夏は浩に背を向けた。

眠ろうとしたものの、なんだか目が覚めてしまった。

布団にくるまりながら、揺れるカーテンを見る。

白いレース模様のそれは、朝日に照らされて少し橙色をしていた。普段特に見向きもしないものだけれど、たまにはじっと眺めるのもいいと思った。

緩やかに揺れるカーテンを見ていると、うとうとしてきた。

もう一眠りしようかな、と楓夏が瞼を閉じようとしたときだった。ぎゅうつと、後ろから力強い腕に抱き寄せられた。

驚きながらも、楓夏は大人しく身を任せた。

抱き寄せられてから、くるりと楓夏は浩の方を向いた。

「おはよう……」

いつもより少し掠れた声で浩が言った。

まだ瞼は重そうだったけれど、瞳はしっかりと楓夏のことを見ていた。

「おはよう。起きたの？ それとも起きてた？」

半分、と浩は答えた。

「楓夏が、髪を触ったあたりから気が付いてた」

そうなんだ、と返事をしながら楓夏は猫のように体をすり寄せた。ゆっくりとした鼓動が聞こえて、なんだか嬉しくなった。

力強くて、優しくて、あったかい。

こうして浩にくつつくのが楓夏は好きだった。

くつついて満足している楓夏を見て浩は言う。

「暑くないのか？」

「なんで？」

「一応毛布の中なんだが」

「そんなの関係ないよ。あついよりも、むしろ気持ちいいよ」

人の温もりはとても心地よくて、安心できる。愛しい人の腕の中は、一番好きな場所。

嬉しさが胸の奥からこみ上げてきて、楓夏はくすりと笑った。

まだ少し眠たげにしていた浩が訝しげな顔をした。

「なんで笑うんだ？ 何か可笑しいことでもあったか」

不思議そうにする浩を見て、楓夏はさっきよりも大きな声で笑う。この愛しい恋人は、少し鈍感なところがある。

乱暴なんじゃなくて、ぶっきらぼうよりも、不器用が当てはまる。そんなところも、好きなだけけれど。

「可笑しいよりは、嬉しいことかな。だって、浩がこうして側にい

てくれるんだよ?」

「当たり前だろう? 俺はお前の事が好きだからな。傍にるのは当然だ」

あまりにもストレートな言葉に楓夏は赤面してしまう。

不器用な割には、時折こうやって恥ずかしいことをよくいうから困ってしまう。

しかも本人は軽く首をかしげながらいうのだから性質が悪い。

「浩が側にいてくれるから、笑うんだよ? だって、しあわせですよ」

楓夏がそういうと、浩は考えこむような表情をした。

「幸福……か」

「浩は、しあわせじゃないの?」

そう尋ねてみると、浩は微かに微笑みながら言った。

「俺自身、幸福というものはつきり理解できていない。だが……お前といて嫌だと思ったことはない。居心地がいいのをしあわせというのなら、そうだな」

楓夏はその言葉を聞いて、ちょっと涙ぐんでしまった。

慌てて、くるりと向きを変えて、浩に顔を見られないようにした。正確には、涙ぐむというよりも、今にも泣きそうな状態だった。

嬉しさで泣くのは、悲しさで泣くよりも全然いいものな気がする。それでも、たぶんみつともない顔をしているだろうから、浩には見られなくなかった。

見られたら、浩は困ったような顔をするのだろう。何か泣かせるようなことをしてしまっただろうか、と。

その優しさを考えてだけでも、嬉しすぎてどうにかなってしまいそうな気がした。

愛しい人から、大事に思われている。好きだといわれる。傍にいてくれる。

これ以上しあわせなことがあるだろうか?

涙もいつの間にか消えていて、楓夏は笑っていた。

高揚した気分のままに、楓夏は浩に尋ねた。

本当は、少しだけまだ目が潤んでいたのだけれど。

「どうして、傍にいてくれるの？ 好きだからだけ？」

どんな返事が返ってくるのかと、ときどきした。

返ってきた浩の答えは――

「守ってやりたいからだ」

守る？ 一体何からだろうと、楓夏は考え込んだ。

特に危ないことには手をだしてないし、そんな気もないけれど

……

「お前が泣かないように。悲しまないように。寂しくないように。

陳腐だが、お前を苦しませる全てのものから、守りたい。それだけだ」

その言葉を聞いて、どうしようもなく胸が熱くなった。

なるべく笑顔のままでいようと頑張っていたんだけれど。

「だから――泣くな？」

我慢できずに、楓夏は泣いてしまった。

顔は背を向けているから見えないようだが、軽くしゃくりあげて

いるので、浩にはばれてしまったらしい。

抱きしめていた腕が、ゆっくりと背中をさすってくれた。

すこしずつ、少しずつ呼吸が落ち着いてくる。

「誰のせいだと思ってるのよ……」

少しすねたような声で楓夏はいう。

「さあな」

返ってきた浩の言葉はそっけなかった。でも、とても暖かくて優しさが込められていた。

服の袖で涙をぬぐって、浩の方へと向き直る。

一体なんだと訝しむ浩の顔を引き寄せて、楓夏は唇へとキスをした。

「なっ……」

顔を離すと、ひどく驚いた顔をしていた。

今までに見たことがないくらいに、動揺しているように見えた。
口をぱくぱく開けたり閉めたりしている浩を見据えて、楓夏は言
った。

「ありがとう」

驚いていた浩の顔が、瞬く間に微笑みへと変わって。

唇に、柔らかなキスが落ちてきた。

どんな言葉よりも確かな想いが伝わってきて、また泣きそうにな
った。

ふわふわとした幸福感に包まれたまま、楓夏は瞼を閉じた。
もう少しだけ、このままでいるのもいいかもしれない……
白いカーテンが、柔らかくはためいていた。

優しいキスを落として 誓いを刻みましよう 愛を守ると

たとえ離れ離れになろうとも 想いは消えることなく美しく

ああ 麗しきかな 無限の愛情

唇の上なら愛情のキス

閉じた目の上なら憧憬のキス

自室で、隼斗は兄の雅斗に勉強を教えてもらっていた。

嫌になるくらい、意味の分からない言葉が並ぶノートから顔をあげると……

すぐ近くに、兄の顔があつた。

テーブル越しに覗き込むようにしていた雅斗と視線があう。

男にしては長すぎる睫が、何回か瞬かれた。自分と不気味なくらいに瓜二つの顔。

整っている顔をじつと見ていたら、わけのわからない衝動が沸いてきた。

それを口にしようか迷つてもごもごしている、雅斗が言った。

「……………なんだ？」

「あの、さ」

はつきりしろと、視線だけで促された。

「目の上にキスしていいか——？」

部屋の時間が、一瞬だけ止まったかのようだった。

数秒後、隼斗は頭をテーブルに思い切りぶつけてしまった。

当然、眉間に皺を寄せた雅斗に殴られたせいである。

ぶつかった衝撃で、ノートに皺がよってしまった。

「いつてえな、何するんだよ!？」

誰が見ても隼斗のせいだが、お星様とご対面したばかりの本人はそれどころではなかった。

「当たり前だろう？ お前が変なことをいいだすからだ」

くらくらす頭を抱えながら、目の前の兄へと抗議をする隼斗。

「変なことってな……アレにもちゃんと意味があるんだぜ？」

「知っている。どちらにせよ、やる相手が違うだろう」

そっついうのは彼女にでもしろ、と雅斗は小さく呟いた。
ちなみに、隼斗に彼女は今も昔もない——雅斗にはきつという
のだろうけれど。

ふてくされながら隼斗が勉強を再開しようとする、前から手が
伸びてきてノートを奪い去った。

「おい、何するんだよ？」

「今日はもう終わりにしておけ。やるだけ無駄だろう？」
ノートを取り上げたのは雅斗だった。

無駄というのは、元からダメだから無駄なのか、さっきの言動が
関係しているのかどちらなのか。

どちらでもよかったが、隼斗の気は未だ晴れなかった。

ペンや消しゴムを散らかしたまま、テーブルからベッドへと隼斗
は移動した。

兄弟で一つの部屋なので、ベッドもダブルだった。

上は兄で、下が弟。

学校が終わって家に帰ってくると、既にそういう風に割り当てら
れていた。

後から雅斗に交換するかといわれたが、隼斗は断った。

そんなに執着していなかったし、何だか情けをかけられたようで
嫌だったから。

兄はそんな気がないだけに、よけいに嫌だった。

ベッドに寝転がりながら、自分のテーブルで読書を始めた双子の
兄を見る。

自分とそっくりの顔。僅かに違うといえば、髪の色くらい。

雅斗は黒髪、隼斗は茶髪だった。染めたわけではなく、元々の色
素の差だった。

兄の方が頭もよく、基本的に器用だった。運動神経も抜群で、そ
れなりに女子からも人気がある。

代わりにというのも変だったが、隼斗はあまり出来がよくなかつ
た。

色々な事が重なりあつて、大きなため息を吐いてしまった。

それに気づいたのか、雅斗が目線はそのままに、言葉だけよこした。

「変な発言の次は、ため息か……どうした？」

「どうしたも何もないんだけどな。羨ましいなあつて？」

「羨ましいだど？ どうして俺を羨ましがる必要があるんだ？」

余程不思議に思ったのか、雅斗は本から顔をあげて、隼斗を見た。隼斗としては、頭を抱えてベッドに潜り込みたい気分だったが。

雅斗は天然というわけではないが、少々鈍いところがある。

勉強ができるからといって、そういうのがよく出来るというわけではないようだ。

「どうしても何も、当たり前だろう？ 雅斗の方が出来がいいんだから」

「お前はお前だろう？」

「それは雅斗の意見だろう？」

周りの人すべてが、そんな風に思っていてくれたら、どんなにいいだろう。

親だつて、学校の人達だつて、双子としてみるんだ。

小さいときから、よく聞いた言葉。お兄ちゃんはいいい子ね、って。いいお兄さんを持って幸せねって。

いつだつて比較されてきた。誰も俺を個人として見てくれない。見てくれるのは、片割れの兄だけ。

だから、憧れることはあれど、嫌いにはなれないのだろう。

でも、と隼斗は自嘲気味に笑う。

憧れなんてキレイなものじゃなくて、ただの嫉妬かもしれないから。

毎日まいにち、羨ましくて仕方がない。

「周りはね、兄貴みたいな考えかたじゃないんだよ」

「気にしなければいいだけだろう。あまり考えすぎるのもよくない」
そついうと、雅斗は視線を本へと戻した。

部屋の中には、本のページを捲る微かな音が響いていた。

隼斗は体を反転させて、枕に顔を埋めた。

明かりが眩しかったのと、情けない顔を見られたくないのと両方だった。

あれでも本人はちゃんと隼斗を心配してくれている。

出来損ないとか、だらしないとか、冷たく突き放してくれたなら、嫌いになっていた。

むかついて、絶対に追い越してやる、とかそういう風にも思えたかもしれない。

しかし、隼斗の兄はかなり優しい部類に入るのだった。

今日みたいに話を聞いてくれるときもある。無論勉強を教えてくれたりもする。

だからそんな雅斗に、並びたいと隼斗は思っている。

追い越すのではなく、同じ場所に。隼斗は隼斗だし、雅斗は雅斗。兄になれることはない。

それでも懂れてるから、頑張つて背伸びをする。

そのたびに、周りの人に突き落とされる。いつも見ているのは兄の背中。

一人で勝手にもがいて、傷ついて、兄に慰められる。

隼斗は自分でもとんでもない奴だとよく思う。

うってかわって、雅斗は周りの眼をまったく言っていないほどに気にしない。

特定の人とつるんでいるところなど見たことがない。関心があるのは、隼斗にだけのように。

ちよくちよく、隼斗のことを気にかけてくれるのだ。

だから時折、兄のセカイがそこで閉じてしまっているのじゃないかと心配になることがある。

本人は自分が弟から羨ましがられる理由はまったくわかっていない。

いつまでたっても、隼斗は同じ場所から動けないでいる。

純粹に兄を慕っていた頃には戻れないままに、行ったり来たりとかなり不安定。

そのたびにそっけない振りをしている雅斗が、内心では心を砕いている事を知っている。

同じ場所に並びたいなんていつておきながら、全然フェアじゃない。

それでも懂れてしまうのは何故なのだろう。

双子という、特別な二人だからなのか。ただ単に、隼斗が嫉妬深いのか。

どちらにせよ、よくわからなかった。

堂々巡りになる頭の中を整理しようと、隼斗はベッドから起き上がった。

何気なく視線を横にやると、本を読んでいたはずの雅斗とぼつちり視線があった。

それに気づいたのか、雅斗はすぐにそっぽを向いてしまった。

「……どうしたんだ？ 何か用？」

「別に。静かになったから、眠っているのかと思ったただけだ」

あんなに眩しい部屋で寝れるわけがない……と思いながら、ベッドから降りて扉へと向かう。

スタスタと歩いていく隼斗を見て、雅斗がいう。

「何処へ行く？ この時間帯はあまり外出しないほうが……」

「だ、れ、が、外に出るっていったよっ！？ 風呂に行ってくるだけだよ」

「風呂なら、さっき入ったはずだが」

「頭すっきりしないから、水風呂でも」

「……風邪を引かないようにしろよ」

じろじろと見ながら雅斗は言った。

わかってる、とだけ返して隼斗は部屋をでた。

部屋の扉を閉めると隼斗は立ち止まった。その顔には苦笑が浮か

んでいた。

やっぱり、兄貴は優しいな。

気になっているのなら、はっきりといえればいいのに。あんなにじろじろ見られていたとは。

兄貴に心配させないようにしないと。

余計な気を使わせないようにさせつつ、同じところへ並びたい。自分で考えておきながら、とてつもなく無理な気がした。

それでも、この憧憬がある限りは自分でいられるような気がした。よく考えれば、何も望まれないよりは、無理なことでも望まれる方がいいのかもしれないから。

雅斗は雅斗、隼斗は隼斗のままで。

すつきりとしなймаまでも、いいのかもしれない。

隼斗は階下のお風呂場へと向かって歩き出した。

望まずとも降り積もる思い　ただ密やかに心を侵食してゆく

片割れへと向かえば砕け散る　破片は己へと突き刺さるだけで

時と共に　憧憬はどこまでも流れていく

閉じた目の上なら憧憬のキス

掌の上なら懇願のキス

消毒液の匂いがするドアを開けると、白いカーテンがふわりと揺れていた。

少しだけ開かれた窓から、柔らかな春風が吹き込んでいた。春の香りを纏った風は、桜色の花びらをも運んできていた。

白い部屋の白いベッドの上で、悠里は静かに横たわっていた。

遼は室内にある椅子を運んで、ベッドの側に座った。

薄く微笑みながら、眠る悠里の顔を遼は眺めた。

まるで死んでいるのではないかと思うほど、静かで穏やかな呼吸。淡い日差しに照らされた顔色は青白い。

悠里が眠っていて良かった。ぼんやりと遼はそう思った。

時折、こうして遼が病室を訪れると、彼女は窓の外を眺めているときがある。

視線は外に向いているのに、景色を見てはいない。

何処をも見ていない、虚ろな視線。その視線が、たまらなく怖かった。

彼女が、自分手の届かないところに行ってしまうような気がするから。

だから、穏やかに眠っている悠里を見て、遼は安心した。

本当はすごく不謹慎なのだけれど。悠里は、いつ死ぬかもわからないのだから。

遼は眠っている悠里の手を取り、掌へと優しくキスを落とす。

細い腕には、点滴の痕が青黒く残っている——悠里は、不治の病に侵されている。

病名も、治療方法さえもわからない。手の施しようのない状態。ただ、幸いなのは痛みを感じないこと。でもそれだけで。

ゆっくりと、ただゆっくりと体が衰弱していく……それはどんなに恐ろしいことだろう。

そんな状態だと、生きていることすら忘れてしまいそうになるんじゃないか。

遼はそう思った。

それに最近は、悠里はよく眠るようになった。浅い眠りではなく、深い眠り。

だんだんと起きていて、言葉を交わす時間が減っていく。

悠里の気持ちよさそうな寝顔を見て遼は思う。

いったい彼女はどんな夢を見ているのだろう。その夢の中に、自分という存在はいるのだろうか。

不安に胸を支配されて、己の無力さに吐き気を催す。

遼にできることといえば、悠里と話してあげること。手を握ってあげること。楽しい話をする事。

少しでも、悠里に笑っていてほしいから。

だから、よく遼は悠里の掌にキスをする。

眠っている彼女に、自分の想いが少しでも届くように。夢の中でも忘れてしまわないように。

それから遼が悠里の髪を撫でていると、悠里はゆっくりと目を開けた。遼は優しく声をかけた。

「おはよう。よく眠れた？」

「ん……おはよう。何だかとてもいい夢をみてたよ」

「そう。どんな夢だったの？」

嬉しそくに微笑みながら悠里はいった。
「遼と一緒にね、桜並木を歩いてたの。とてもたくさんの桜が咲いてて、すごく綺麗だった」

今度車椅子で見に行こうな、といいながら遼の心は晴れなかった。

忘れられていないのは嬉しいけれども、そう喜んでばかりもいられない。いつどうなるかわからないのだ。

明日にでも脳に障害が起こって、記憶を失う可能性もないわけじゃない。

そんな不安定な状態なのに、悠里は笑ってくれる。だから、自分も笑わなくちゃいけない。

いつのまにか、遼はそんな風に思うようになっていた。

悠里の眼が完全に覚めたのを確認すると、遼は小型冷蔵庫からりんごを取り出して、剥き出した。

しゃりしゃりと小気味いい音が病室に響いた。

手早く向かれてカットされたりんごの形は、かわいいウサギ。悠里は、ウサギの形が大好きだから。

起き上がった悠里に、つまようじに刺したウサギを一つ渡した。

にこにこ微笑みながら、悠里はそれを美味しそうに食べていた。特別高級なりんごでもないのに、そんな風に食べてくれる彼女を遼は愛しいと思った。

理由を問えば、きっとこういうのだろう。

遼が向いてくれたから、美味しいんだよって。悠里は、とても優しい人だから。

りんごウサギを食べながら、悠里は話す。

「最近ね、体の調子もいいんだよ。だるくないし、お腹もちやんと空くし。夜も、よく眠れるの」

「調子がいいからって、あんまり食べ過ぎるなよ？ 退院したら、

体型変わってましたなんて笑えないからな……」

「そんなには食べないよ。遼こそ、体大丈夫？」

自分の事なんていいから、ただ幸せに生きて欲しい。

「別に大丈夫だけど、どうして？」

「だって、たまにわたしが熱だしたりすると、夜通し側にいてくれるんだって。看護婦さんから聞いたよ？」

「ああ。いいんだよ、別に。好きで悠里のところに来ているんだか

らさ。気にしないでいいんだよ」

それならいいけど……といって、悠里はつまようじを置いた。結構あったりんごウサギは、いつの間にか半分くらいに減っていた。やはり、りんごが好きらしい。

皿を片付けて、悠里の方を見ると、彼女は窓の外を眺めていた。その視線は話していたときと違って、どこかおぼつかなかった。また――外を見ている。正確には、景色でもない何か。

そんな顔を見たくなくて、自分を見て欲しくて、遼は気を引くように声を掛ける。

「そういえばさ、桜、満開できれいだよな」

くるりと、悠里が振り向いた。その顔は、いつもと同じで。

「ね、きれいだよ。香りもするんだけど……ほら、花びらも飛んで来るんだよ」

そういつて悠里は自分の枕元に落ちている、薄い花びらを何枚か拾い上げた。

皮肉な事に、悠里の白い指に、薄い桜色の花びらはよく映えた。

ぼつりと、悠里が言った。

「夏になったら、ひまわり畑に行きたいな」

少しだけ、遼は驚いた。ひまわりが好きだなんて、今まで一度も聞いたことがなかったから。

「ひまわりか……いいかも。悠里って、ひまわり好きだったっけ？」

「正確には、好きになったの。前はね、ちょっと眩しいかなって思ってたんだけど……」

そついいながら、また悠里は窓の外を眺めた。

「今はね、元気があっていいなって。なんだか、わたしも元気をもえそう。気がしたから」

こちらを向いて、ふわりと微笑んだ悠里。

その笑顔は、今にも消えてしまいそうな程儚かったけど、とても綺麗だった。

やっぱり、彼女の笑顔が一番だ。遼はそう思った。

その笑顔を、ずっと見ていられるのなら。

「行けばいいんだよ、ひまわり畑。悠里が望みさえすれば、連れてってあげるから」

だから、どうか泣かないで。

「ありがとう」

悠里は、そう言うてくれた。

その後しばらく喋っていたけれど、悠里は疲れたのか眠ってしまった。

すうすうと気持ちよさそうに眠る悠里に、遼は毛布をかけてあげる。

少しだけ変な体制だったので、起こさないようにして楽な姿勢にしてあげた。

抱き上げた悠里の体はとても軽くて、遼は泣きそうになった。

服も調べてあげて、最後に掌を握ってから、くちづけた。

遼は、ただ願うことしかできなかった。祈ることに何の意味もないのは、知っていたから。

悠里を助ける為に必要なものがあるのなら、何だって用意しているだろう。

たえ神様に、お前の命と引き換えだといわれても、即座に頷くだろう。

誰かを殺して助けられるのなら、躊躇いもなく罪を犯すだろう。何をしても構わないほどに、遼にとって悠里は大切な存在だから。だからこそ、懇願は強くなった。

笑っていて、くれるだけでいい。生きている、それだけでいい。悲しい顔をしないで、泣かないで。俯かないで、前を見て歩いて。真っ直ぐに、進んで欲しい。

いつ何処にいても、幸せであつて欲しい。
悠里の隣に、自分がいなくてもいいから。他の誰かのものになつてもいいから。

自分だけを見てくれなくてもいいから。

どうか、俺より先に死なないで――

遼は自嘲気味に笑ってから――ベッドの上に、頭を静かに乗せた。
穏やかな悠里の心音が、聞こえたような気がした。

笑っていてください 泣かないでください 生きていてください
しあわせに

誰もが望む、ほんの些細な願い事。

それはゆつくりと舞い降りて――やがて消えていく。

掌の上なら懇願のキス

腕と首なら欲望のキス

ゆらゆらと陽炎のように蠢く漆黒の闇。

そんな闇が街を覆いつくす夜。

ある高級ホテルの一室には、仄かな明かりが灯っていた。

綺麗な硝子細工のシャンデリア。発する光は淡く妖しく。

闇を払う明かりは、ベッドの上にいる二人を白く照らしていた。

ベッドに横たわりながら、カツヤは隣でネイルを整えているシオリを見た。

さつきまで事に励んでいたというのに、涼しい顔をしている。

ネイルの鮮やか過ぎる赤を見ながら思う。

彼女は、明日にはまた知らぬ誰かの所へ行くのだろう。愛なんてないのは、カツヤもわかっている。

二人の関係には、綺麗なネイルなんて必要ないのだから。

部屋の空気には熱つばさがまだ残っていた。自分の体は、中途半端に生温かった。

曖昧な熱を逃がすかのように寝返りをうち、シオリに声を掛けた。

「シャワー、浴びてこないのか？」

ネイルから視線を外して、シオリは微笑んだ。

「まだ、いいわ。これで終わりじゃないでしょう？」

彼女は俺を見透かしているかのように言った。

「当たり前だ。シオリだって、満足してないだろう、どうせ」

答える代わりに、彼女は艶やかに微笑んだ。その唇には、いつの間にか真っ赤なルーージュが塗られていた。

その赤から、彼女の均整の取れた体へと視線を移した。

彼女の体は、誰が見ても美しいと思えるほどにバランスが取れて

いた。

彼女も、よく自分でそう言っている。

今までの人みんな、私の事をキレイと言っていたわ、と。

カツヤとシオリが出会ったのは、蒸す様な熱帯夜だった。

会社の帰りに、ふらりと立ち寄った飲み屋で会った。

そこは馴染みの店でもなく、カツヤにとって初めての場所だった。普段なら、あまり知らない店には立ち入らないのに、その夜は違った。

知らない店で、馴染みのないマスターが入れてくれるカクテルのみ、シオリと出会った。

その時のシオリの服装は、今でもよく覚えている。

赤いルーージュに、胸元の大きく開いた赤いドレス。シオリは、赤い色が好きだといった。

そのまま二人は他愛のない話をして、ホテルへと向かった。

特別好きになったわけでもなかった。ただ、なんとなくだった。

ホテルへ向かい、無我夢中で二人はお互いを求め合った。熱く、うねるような夜の中で。

カツヤはそういう相手との行為を嫌ってはいなかったし、シオリも慣れた様子だった。

ただ、予想と違ったのは、二人の関係が一度では終わらなかったことだろうか。

今夜のように、時折連絡を取り、どちらからとでもなく求め合う。そういう気分の時は、出会った居酒屋へ行くと彼女に会えるのだった。

どうして一度で終わらなかったのか、よくわからない。

体の相性が良かったのかかもしれないし、他の所でも何か当てはまるものがあつたのかもしれない。

ただ、カツヤはこう考えていた。

あの夜の欲望が——消えなかったのではないかと。

普段なら欲は、今にも消えてしまいそうな程に、薄い。

それが、シオリという存在によって燃え上がったのではないかなんとか、考えただけのことだったが、的を得ている気がしていた。

その欲は収まることを知らず、会うたびに強くなることがその証明だったから。

「カツヤ、どうしたの？」

甘えたような、シオリの声でカツヤは我に帰った。

何事かと思つて見ると、彼女の体が腕の中にあつた。どうやら、無意識で抱き寄せていたようだ。

そのことに少し驚きながらも、カツヤは細い腰を抱く腕に力を込めた。

「珍しいね、いつもくつつかないのに」

「たまにはいいだろう」

それもそうね、とシオリは言い、気まぐれな猫の様に自分から体をすり寄せてきた。

甘えられて、嫌な気分になる男はいない。それはカツヤも同じだった。

そのまま互いの温もりを感じていたが、カツヤは不意に言葉を零した。

「シオリは、俺といて楽しいか？」

きょとんとした顔で、シオリはカツヤを見た。

「どうしたのよ、いきなり？」

カツヤは無言で、返事を促した。

「そうね……楽しいから、いるのよ。気楽でいいじゃない」

「後腐れがないから？」

「そう。それはカツヤも同じでしょう？ ……どうしたのよ、今日は」

「別に。ちょっと気になっただけさ」

なんてことはない。

「なあに、もしかして妬いてるの、カツヤ？」

「妬くつていったい誰にだよ」

「あなたの知らない、私と寝た男の人に」

何故かシオリは、可笑しそうに唇を吊り上げている。それを見て、カツヤは少し不愉快になった。

確かに、どんな風なのかは気にはなる。だが、それは俺が干渉することじゃない。

それが楽だから、シオリとこうやって続いているんだから。

それでもやはりカツヤの胸には何かが残った。

俺の知らない、シオリ。

どんな言葉を囁いて、どんな甘い声で啼いて、どんな微笑を見せるのか。

まったく想像はできなかった。代わりに残ったのは、揺らめく欲。誰と彼女が寝ていようと構わない。今シオリはカツヤの目の前にいる。

今日この夜だけは、彼女は俺のものだ。

醜い独占欲に駆られて、カツヤはシオリを組み敷いた。

人間欲が高まってくると、少々乱暴になってしまいうらい。

「あら、妙に元気。やっぱり妬いてるんでしょう？」

「何がそんなに楽しいんだ？」

「カツヤが嫉妬しているからよ。嬉しいじゃない？」

彼女の言うことが、本当かどうかなんてわからない。でも知る必要もないとカツヤは思った。

シオリの体を指でまさぐると、彼女はくすぐったそうに笑った。何を思ったのか自分から、体を腕に絡めてきた。

そのまま、シオリはカツヤの腕にくちづけた。

「……何のつもりだよ？」

「深い意味はないわ。なんだか、わたしたち猫みたいじゃない？」

じゃれあつてゐる」

相変わらず、彼女は楽しそうな表情をしていた。

少し日に焼けているカツヤの腕には、真つ赤なルージュの痕が残った。

お返しとばかりに、俺は彼女の唇を奪おうとして、止まった。

場所をずらしてカツヤがくちづけたのは、首筋だった。

彼女は、少しだけ目を細めた。

カツヤはそのまま、シオリの首筋に痕を幾度となく刻んだ。

収まるどころか、どんどん昂ぶる欲を吐き出すかのように。

赤までいかない朱色の痕は、まるで花びらのように見えた。

それを見て、カツヤは美しいと思った。今この瞬間、自分を支配している感情を。

欲望という感情に囚われた二人の影は重なっていった。

二人の夜は、まだまだ終わらない。

白い首筋には、強くキスを 愛しい腕にはついにばむようなキスを

今宵欲望の花 綺麗に咲かせて魅せましょう

腕と首なら欲望のキス

さてそのほかは、みな狂気の沙汰

雨粒が降り注ぐ昼下がり。透夜は急ぎ足で階段を上っていた。

マンションのエレベーターを利用したようとしたものの、生憎故障中だった。

いきなり降りだした雨のせいで、足元がよく滑る。

転ばぬように気をつけながら、五階に住む恋人の元へと向かっていた。

本当はもっと早い時間に来る予定だったが、用事があつて遅れてしまった。

でも、雨の日の逢瀬というのも悪くはないかもしれないと透夜は思った。

かなり急いで階段を上っていたので、五階へと着くのは早かった。扉の前へ行き、靴から鍵を出して開ける。水気を払ってから玄関へと入り、部屋の中にいる彼女へと声を掛けた。

「愛理、来たよ」

開け放たれた窓から外を向いていた愛理が、透夜のほうへとくると向き直った。

「あ……こんにちわ、透夜」

そのままとてと走つてこようとして、少しよろめいた。

転びそうになるのを見て、透夜は慌てて愛理の傍へと近づいた。

「そんなに急がなくてもいいよ。大丈夫？」

「ええ、大丈夫。ありがとうね」

愛理をベッドに座らせてから、透夜は開け放たれていた窓を閉めた。

床を見ると、少し雨が吹き込んでしまっていた。つまり、愛理も濡れてしまったのだらう。

部屋に置かれているタンスの中からタオルを取り出してベッドへ

と向かった。

座っている愛理はあらぬ方向を見ていた。

隣に腰掛けて、自分の方へと引き寄せた。声を掛けてから、透夜は髪の毛を拭きはじめた。

「ねえ愛理」

「なに？」

「さっき窓の外を向いていたけれど……何を見ていたんだい？」

彼女は、目が見えないはずなのに。愛理は交通事故にあって見えなくなってしまったから。

不思議に思いながら、愛理に尋ねた。

「見えないけれど、外の雰囲気とか、匂いとかは分かるから。雨降ってるでしょ？ 少し湿っぽかった」

「そう。雨は好きだったかな？」

髪を拭きながら、愛理に透夜は尋ねる。

微かに微笑みながら愛理は言った。

「別に好きじゃないけれど……目が見えない分、そういうものごとでも大切に感じるのよ」

目が見えないと、他の部分が敏感になるというけれど……そういうものなのかもしれない。

雨の日の匂いとか、空気とかを大事にするのもいいけれど――

「でも、濡れてしまったよね？ 次は気をつけないと」

透夜がそういうと、愛理は少し俯いてしまった。

「ええ、そうねごめんなさい。次からは気をつけるわ」

「まあ僕がいるときならばいいけれどね。ちゃんと拭いてあげられるし」

髪を拭き終わったから、次は顔も拭いてしまおう。

「さ、次は顔を拭くからね。最初は目は閉じていてね」

素直に頷いた愛理を見て、自然と透夜の顔も綻んだ。

ベッドを離れ、濡れタオルを用意してから彼女の顔を拭き始めた。力を入れすぎないように丁寧に顔を拭っていく。愛理の表情を見

ると、気持ちよさそうに見える。

手際よく顔を拭いた後に、透夜は愛理に声を掛けた。

「次は、目の下を拭くから、開いたままでね。……怖い？」

愛理の眼は視力を失っている。明暗もわからないし、触れられても何も感じないらしい。

見えないから意識しなくなり、感覚までもが薄れてしまうらしい。その状態だと、いくら親しい人とはいえ怖いのではないのだろうか。

そんな心配をしていると愛理が言った。

「別に……透夜なら平気だよ。ありがとう」

そつと目を開いた愛理の顔を透夜は覗き込んだ。

黒く濡れた瞳には、自分の顔がぼんやりと映っている。光を反射するものの、ただの光のままです。

口元は微笑んだままなのに、虚ろな瞳を開いた途端、愛理の顔が無表情に見えた。

いったい暗闇の中で彼女は何を考えているのだろうか。

そんな事を思いながら目の下をタオルで拭う。

そのまま、終わったよ……と声を掛けようとして、止まった。

その一瞬、透夜の頭の中にとある考えがよぎった。

口角を吊り上げて、透夜は小さく笑った。

そのまま、タオルを下に落としてから、愛理の顔へと近づいた。

軽く臉を押さえたまま、眼球へと口付けた。羽のように、軽いキスを。

「透夜？　どうかしたの」

すぐ傍から愛理の声が聞こえて、透夜は我に返り愛理から離れた。自分の中の感情を抑えながら、愛理に声を掛ける。

「なんでもないよ……はい、拭き終わったよ」

「ありがとう」

何も知らない彼女は綺麗に微笑んだ。その笑顔を見てまた胸がざわついた。

タオルを片付けてから、愛理の隣へと腰掛けた。片手で抱き寄せ、空いている手で髪を梳く。

自分の体に愛理が体重を預けてくるのを透夜は感じていた。薄く微笑みながら、愛理のことを考えていた。

二ヶ月前、駅前の道路で愛理は交通事故にあった。

体の方は特に大きな怪我はなかったのだけれど、割れた窓ガラスの破片が目に入って失明した。

また事故のときに、頭を強く打っていた。そのせいで、一部の記憶も失ってしまった。

事故の前、愛理は誰かに突き飛ばされたといっていた。姿はわからなかったけれど。

今までの知識、日常生活に必要なこと、自分の名前。そのどれをも愛理は失っていないかった。

失ってしまったのはただひとつ、透夜に関する記憶だけ。

病室のベッドに横たわる彼女を眺めていた透夜に、目覚めた彼女はいったのだ。

「どちら様ですか？」

その時を思い出すと、自虐的な笑みが透夜の口から漏れた。

愛理の体が少し動いた気がしたけれど、気にしないことにした。

その時は、罰が当たったんだろうと透夜は思った。

だって、愛理を突き飛ばしたのは透夜自身なのだから。

カミサマなんていないから、きっと自業自得なのだろうと。ずっとそう思い続けている。

愛理が記憶を失う前、透夜の関係は少し冷めはじめていた。他に男がいたのかどうかはわからない。

けれども、透夜から愛理の関心が離れていったのは事実。だから、焦ったんだ。

だから……怪我をすれば、看病することができるから。軽く突き飛ばしてみたんだ。

その結果、愛理に忘れられてしまった。本来は悲しむべきなのだろう。愛する人なのだから。

でも、透夜はそうは思わなかった。

愛理は、透夜だけを忘れてしまったことに罪悪感を感じている。そして、責任も。

そんな彼女をとて愛しく思っている。透夜に対して責任を感じている彼女を。

思い出そうと努力をして、思い出せないと悩んで、申し訳ないと悲しくなつて。

ぜんぶ、透夜のことを考えてくれているのだから。

たとえ過去に興味を失っていたのだとしても、今は一心に考えてくれている。

だから、透夜は今の状況に満足している。

愛しい愛理が傍にいて、一生懸命に想ってくれている今の状況を。

自分でも、歪んだ考えだとは自覚している。けれど、愛理さえいてくれればそれでいい。

たとえ、愛理から拒絶されていたとしても、だ。

「ねえ……透夜、どうしたの？ さっきから笑っているけれど？」

「ん……ああ、声にでてたんだね。ちょっと、可笑しくて仕方がないことを思い出していたんだよ」

ふうん、といいながら愛理はそれでも微笑んでいた。

透夜は目を細めながら愛理に尋ねた。

「ねえ、愛理は僕のこと——愛しているよね？」

それは、二人を縛り続けるための言葉。返ってくる答えは、常に望むものでなければならぬ。

もしも違えることがあったならば……その時はまた繰り返すだけ。
予想どおり、返事は透夜の望むものだった。

「ええ。愛してるわ。今も、前の私もきつとそういわ
少しだけ後ろめたそうに笑いながら話す愛理。
それを眺めながら、透夜は胸の奥でそつと呟く。

壊れても 愛してあげるよ

歪んだ想いを込めて、透夜は愛理を抱きしめた。

狂気の想いはいつまでも燻り続ける 消えることなく密やかに

時が来れば いずれは熟す禁断の果実

抗え切れずに きつと果実を口にしてしまうのだろう

さてそのほかは、みな狂気の沙汰

さてそのほかは、みな狂気の沙汰（後書き）

これにて、短編集は最後となります。

どうでしたでしょうか、8つの色とりどりの想いのお話。
お気に召すものが、ひとつでもあったのなら幸いです。

普段の妙なものからは趣を変えてみました。

それでもやっぱり最後は病んでいます。

少しずつ、こういう風な作品も練習していきたいなと思いました。

ご覧いただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4470i/>

a kiss ~ 接吻

2010年10月8日15時26分発行